

イニシエーション概念における“通過性”  
—教育臨床の視点から—

伊藤 真平



# イニシエーション概念における“通過性” —教育臨床の視点から—

伊藤 真平\*

## Reconsidering the Rites of Passage in the Concept of Initiation: From the Viewpoint of Clinical Psychology and Education

ITO Shinpei

The concepts of the rites of passage and initiation advocated by van Gennep are very known. They focus on the process of transformation not only in human life, but also on the process of all changing phenomena in nature and the universe. Gennep suggested that these concepts have three stages: separation, liminality, and incorporation. Today, the concept of the initiation is discussed in various fields, such as religious studies, pedagogy, clinical psychology, and anthropology. Traditional initiation proceeds through death and rebirth. Analytical psychology also emphasizes the aspect of entering a new society or stage, with a transition through the death of an old self and the rebirth of a new self. In this paper, the author reexamines the original concept of initiation and recognizes the high value of the aspect of the process of passage in initiation from the viewpoint of clinical psychology in school life of adolescent students. Today, adaptation classes for truant pupils have been established everywhere in Japan. It is even more important for children to spend their time safely there, even if they cannot attend their own school or make concrete achievements. In conclusion, as children spend their time in those classes, they may experience abandonment and a “small” initiation, a passage from an old self into the new self, as others offer them psychological support.

**キーワード:** イニシエーション、通過、分析心理学、適応指導教室

**Keywords :** initiation, passage, analytical psychology, adaptation class

---

\* 東洋英和女学院大学大学院 人間科学研究科 人間科学専攻 博士後期過程  
Area of Human Sciences, Department of Human Sciences, The Graduate School of Toyo Eiwa University.

## 1. はじめに

かつて個人の一生のそれぞれの区切りに儀礼が存在した。現在では、それがイニシエーション (initiation) と呼ばれる事象として、文化人類学の研究対象となっている。文化人類学者の van Gennep は、『通過儀礼 (1909)』の中で、妊娠や出産、加入礼や葬儀などを取り上げ、個人をある特定の段階から別の特定の段階への通過を可能にするために行う儀礼として、「通過儀礼 (rites de passage)」の概念を提唱した。そして、どの通過儀礼も「分離儀礼」、「過渡儀礼」、「統合儀礼」の三段階の構造図式を持つことを示している。

また、「分離」と「統合」の境界にある「過渡」段階を「リミネール (liminaire)」と表現し、「分離」を「プレリミネール (préliminaire)」、「統合」を「ポストリミネール (postliminaire)」として、境界を「通過」して、次の段階へと「加入」していく過程を明らかにする論を展開する。van Gennep によれば、「過渡儀礼」自体が独立した形を取り、三段階図式は「過渡」期での「分離」、「過渡」、「統合」など、重複した形になることもあると言う。加えて、「分離儀礼」は葬儀で、「統合儀礼」は結婚式でよく見られるなど、各段階は1つの儀礼の中で同程度に発達しているとは限らないことも指摘し、単に構造図式に収めた理解ができない広範な意味合いを持った概念であることが示されている。

さらに、van Gennep は「宇宙全体が、一定のリズムに従っており、このリズムは人間生活にも余波を及ぼす——。宇宙にも種々の発展段階と移行の期間、前進と停滞、停止などの期間がある。したがって、天界における推移に関する儀式、ある月から次の月への推移 (満月の祭り) とか、季節の移り変わりや年の変わり目の祭り、新年の祭りなども人間の通過儀礼に含めるべきである」と述べる。ここから、原義に基づく通過儀礼概念においては、人生の節目における移行に際して行われる儀礼を言い表すことに留まらず、繰り返し生じる自然や宇宙の変化をも含めた、あらゆる「通過」の現象に本質が

ある概念と理解できる。

現代は、通過儀礼および加入儀礼の用語としてイニシエーションが使用されたり、通過儀礼を含んだ包括的概念としてイニシエーションが位置づけられるなど、様々な解釈が加えられながら、文化人類学に留まらず、宗教学や教育学、文学や臨床心理学など多くの領域で論じられることとなった。中でも、宗教学者の Eliade (1958) が、「近代世界の特色の1つは深い意義を持つイニシエーション儀礼が消滅し去ったことだ」と述べ、宗教的体験によって「死と再生」を伴うような内的な根本的変容を遂げる儀礼としてイニシエーションを解釈し、論じたことは多大な影響と貢献があったと言える。

また、臨床心理学者の河合隼雄 (1975) は、かつては一度の儀礼で大人社会に参入できたとする成人への心理的加入儀礼としてのイニシエーションについて論じ、現代社会では内面的に「何度も」体験していかなければならないと述べている。Eliade の想定した劇的な「死と再生」の儀礼が失われた現代では、漸進的に「通過」し続けていくことも、イニシエーション体験のあり方として考えていくことができるという可能性を示していると言えるだろう。現代の青年については、「死と再生」による「分離」から加入への変容に留まらない、あらゆる「通過」の体験を含めて考えていかなければならないように思える。本論では、臨床心理学における教育臨床、特に適応指導教室で見られる子どもの心理的成長体験を援用しながら、イニシエーションのあり方を再考してみたい。

## 2. イニシエーション概念の諸相

### 2-1. van Gennep の通過儀礼概念とイニシエーション概念

van Gennep は、通過儀礼における成熟儀礼、秘密結社や宗教的結社への加入儀礼をイニシエーションとして捉えており、原義のイニシエーションを、通過儀礼概念に包含される儀礼の一つとした。また、伝統的・歴史的な成熟儀礼の多くは、割礼や抜歯などの身体毀損を伴う

が、これは生理的成熟を示すためでなく、新たな社会集団に参入するに値するかを証明するという社会的意義に根差した試練であるという前提も示した。van Gennep が「儀礼が社会と自然界とを結びつけ、その結果、社会が自然界と同様に避けられない人生の現実となる」と述べるように、イニシエーション儀礼も社会的側面と強い繋がりを持つ概念と言える。

また、van Gennep の貢献は、通過儀礼が特定集団や段階への「加入」でなく、1つの段階を「通過」し切ったためのものであると示した点にある。まず、van Gennep が、通過儀礼一般に認められる特徴として挙げる、日常空間としての「俗」、儀礼が行われる非日常空間としての「聖」の概念から考えてみたい。van Gennep によれば、「俗」と「聖」は可変的で、儀礼の受け手が「俗」にも「聖」にも属さない中立地帯としての中間的立場に置かれたとき、2つの世界を彷徨うという「過渡」の状況が生まれるとされる。そして、その境界を「通過」したとき、何者でもない者から何者かになったという変化、すなわち1つの段階を「通過」した動きを描出できると言う。

この「過渡」の重要性は Turner (1969) も指摘している。すなわち、Turner は、「過渡」期に日常的な社会構造から隔離、解放されることで、社会的アイデンティティを一時的に失い、いずれの社会構造にも属さない「リミナリティ (liminality)」の状態に置かれるとする。そして、その状態にあるときには、均質性と平等性を持った連帯的な繋がりでは結ばれた「コムニタス (communitas)」という共同体が生まれ、そこで新たなあり方を獲得できると考えている。

実際の儀礼に見られる中立地帯とは、母親から切り離され、別の場所にある小屋に隔離されて過ごすことや門をくぐること、敷居を跨ぐことや儀礼の受け手が一定期間地に足をつけないようにつぎ上げられることなどによって表現される。それらはいずれも旧来の場所や状態から「分離」される瞬間を持ち、これによ

て非日常的空間に移されたことを象徴的に意味づけているのである。この象徴的理解も van Gennep の貢献であり、その中で最も劇的な形を取るもの象徴として「死と再生」を挙げている。

さらに、van Gennep は、大々的に行われる儀礼だけでなく、微細な要素や行為をも通過儀礼のカテゴリーとして検討している点が興味深い。例えば、「髪の毛を献髪する」ことは、髪の毛を切ることと、献納・聖別・供犠という2つの行為を含み、切る方はもといた世界からの分離、献納する方は「聖」なる世界と自らを結び付ける儀礼を行っていると考えられる。臨床心理学においても、不登校やひきこもりの子どもが髪を切ることを契機に家から出るプロセスが述べられ (例えば、伊藤, 1997; 秋山, 2007)、散髪という行為も通過性を備えるものとして捉えられるだろう。上述の門をくぐる、敷居をまたぐ、かつぎ上げることもその一例である。van Gennep が、このようなあらゆる要素や行為も象徴的意味づけを持った通過儀礼として理解した点は、イニシエーション概念を広く理解していく上で重要になると考えられる。

## 2-2. Eliade のイニシエーション概念

Eliade (1958) は、儀礼の外的な形式や構造でなく、個人の内的体験に現われる共通した象徴性という観点からイニシエーション論を展開し、霊的体験によって超越的な宗教的段階に至ることを述べている。そして、世界が神話的世界観に支えられているという前提のもと、成人式、秘儀集団への加入礼、呪医やシャーマンへの召命という3つの型からイニシエーションを捉え、「一個の儀礼と口頭教育 (oral teaching) 群をあらわすが、その目的は加入させる人間の宗教的、社会的地位を決定的に変更すること」と定義して、「哲学的にいうならば、実存条件の根本的な変革に等しい」と主張した。

ここでは、「死と再生」の象徴を中心に、宇宙論的な「降下」と「上昇」という、象徴的な垂直軸上の動きが捉えられている。シャーマニ

ズムのイニシエーションでは、エクスタシー（脱魂）によるヴィジョンとして、自分の身体がばらばらに引き裂かれて「解体」されることを、切り取られた頭部が一本の柱を伝って見ること、天上界へと向かう象徴的な「上昇」が果たされ、最終的に聖別を受けていくとされる。このような Eliade のイニシエーション論の基盤には、キリスト教的思想があり、「死」の問題が重視されている。そのために、これまでとは全く異なる別の自分へと変容し、新たな段階への加入を遂げる劇的な展開が中核的なイメージとして描かれたのだろう。

このような宗教的な象徴性に着目した「死と再生」を中心に置いた論の展開に Eliade の功績があることは言うまでもないが、一方で、キリスト教的理解を最高到達点として、他の宗教を解釈している点に飛躍があるとする批判がある（La Fontaine, 1985）。また、現代の宗教学では、儀礼を「季節儀礼」と「通過儀礼」に分けており、本来は両者の儀礼を含むはずの van Gennep の通過儀礼概念が、狭義の「通過儀礼」を説明する際にのみに用いられてしまっているという指摘もある（柳川, 1989；渡辺, 2011）。無論、Eliade のような「死と再生」による根本的な内的変容を経て新たな集団へ加入を果たしていくという側面は、イニシエーション概念を理解していく上で最も重要であるだろう。ただ、本論では、この立場を踏まえつつも、原義に立ち返り、「通過」していく過程としてのイニシエーションの側面への試論を行いたい。

### 2-3. イニシエーション概念における「通過」の重要性

社会人類学者の La Fontaine は、イニシエーション概念を理解する上で、「通過」の視点に重きを置くことの重要性を指摘する。これは、現在のイニシエーション研究が、「子供から大人への成熟期の儀礼のみ」を指し、「加入」することに焦点づけているために、van Gennep が用いる原義の通過儀礼概念およびイニシエーション概念とのズレが起きていることに由来し

ている。

同様に、La Fontaine は、「死と再生」をはじめとする象徴的次元からイニシエーション儀礼について考察を深めながら、「加入」が結果として果たされたとしても、それは個人の地位の変化や移行としての「儀礼を通過したという事実」があるからこそのものであって、イニシエーションの目的はあくまで「通過」にあると改めて強調している点は興味深い。イニシエーションの受け手にとって「通過したという事実」は、自分が以前の段階を越えて、新しい地位に相応しい自分になったという実感に繋がるだろう。「通過」の側面に焦点を当てると、「死と再生」の体験によって新たな集団に「加入」するという視点からでは捉えきれない、細やかな変化や移行を捉えていくことができるのではないだろうか。

また、文化人類学者の綾部（2006, 2012）も、現代の我が国のイニシエーションのありようを、van Gennep の通過儀礼概念を踏まえて考察し、その本質を捉える試みを行っている。綾部（2006）は、van Gennep の貢献が、儀礼が何らかの形で「通過」を介在させるものであり、儀礼の三段階がほぼ普遍的に観察されることを看破したことにあるとする。そして、イニシエーションに重要なのは、割礼や空間的移動としての「身体性を伴うこと」などが「何らかの社会的変化」を表すことであると述べる。ここには、結果として、大人になったこと、あるいは社会的地位が上がったことなど、「加入」が果たされたとしても、その到達点に力点を置かない、「通過」していく過程そのものを強調する側面を見ることができる。

ただ、同時に、現代は儀礼に相当する「イニシエーション的なもの」が「皆無に等しく、いかに内的体験としてイニシエーション体験を促していくことができるかが重要であるとも言う。そのため、儀礼を集団で受けるものを「イニシエーション儀礼」、人々に成長や変化の自覚を促すある程度制度化された経験（巡礼、徴兵、社員研修など）を「拡大イニシエー

ション」、儀礼でも制度でもないが一定のイニシエーション機能を持つ個人的経験（アルバイト、自活、一人旅、恋愛、留学、就職活動、就労経験など）を「非制度的イニシエーション」とし、これらを包括して、形容詞のつかない「イニシエーション」として再定置した。そして、「既に存在するもの」を「非制度的イニシエーション」として、いかに儀礼的に機能させられるかという問題を提起する。さらに、儀礼を「人間社会のあらゆる場所と時間に遍在する界面、すなわち、異質なモノ、空間、時間、制度などをつなぐインターフェイス」（綾部, 2012）として捉え、インターフェイスとしての性質を備えるならば、儀礼ではないものも儀礼なるものとして機能する可能性を示唆する。あらゆるものの「通過」を、通過儀礼およびイニシエーションから捉える van Gennep の原義に戻れば、生活に潜在するあらゆる「既にあるもの」の「通過」に焦点を当てながら、既にあるイニシエーション概念を拡大して理解していくことができるのではないかと考えられる。

### 3. 分析心理学におけるイニシエーション概念の理解

心理療法はイニシエーションを内的変容のアナロジーとして捉える。Jung が、『変容の象徴 (1912)』で患者の語る夢や空想を伝統的な儀礼に現われる「死と再生」の象徴から理解して以降、分析心理学では「死と再生」を中核的体験とするイニシエーション過程が心理療法過程を理解していく1つの視点となった。橋本 (2007) は、この見方を「物語的イニシエーション・モデル」と「実存的イニシエーション・モデル」に分ける。前者は「分離」と「統合」に焦点を当て、無意識内容にイニシエーションの象徴を見出し、心理療法過程を1つの筋書きとして理解する立場、後者は「過渡」に焦点を当て、クライアントの実存運動を捉える立場である。本章では、2つのモデルからイニシエーション概念を整理して現代のイニシエーションのあり方を考えていくこととする。

#### 3-1. 物語的イニシエーション・モデル

Jung はイニシエーション概念の厳密な定義づけを行っていないが、『自我と無意識 (1928)』でマナ人格を取り上げながら、イニシエーションが「動物的状态」から「人間の状态」へと移行させる魔術的手段であり、大きな精神的意義を持った「変容の秘儀」であると述べている。マナ人格とは、英雄や神人、司祭など、絶大な威信を持った優性形質を表す元型である。このマナ人格が意識化されることで、両親から真に解放され、「新たなる子ども」として「再生」し、自分独自の個性に目覚めていく点に、儀礼によるイニシエーションとの一致が見られると言う。また、心理療法との符合を見出した錬金術では、「自然に反する作業；opus contra naturam (Jung, 1945)」が行われるが、心理療法もまた「自然」に逆らって内省を深め、変容を遂げる作業であり、イニシエーションは心理療法過程と密に関わる中核概念と理解できるとされる。

そして、Jung は *Two Essays in Analytical Psychology* (1953) で、「無意識内容の中に、イニシエーションの完全な象徴が現れるのは、まぎれもなく明確な事実である。——重要なのは、イニシエーションの象徴が客観的事実かどうかではなく、これらの無意識内容がイニシエーションの実施に匹敵するかどうかであり、それらの内容が人間の心に影響を与えるかどうかである。この点は十分強調しておかねばならない。また、その無意識内容が望ましいものであるかが問題でもなく、そのような内容が存在し、作用しているというだけで十分である」と述べ、「イニシエーション元型」の存在を主張する。Jung は、無意識内容の表現をイニシエーションの象徴として捉えるとき、それが個人の決定的な変容に繋がっていくものとして考えたのだろう。だからこそ、内的変容としてのイニシエーションが、「自然に反する作業」であっても、「自然」に現れる心理的過程として、普遍的に見られる元型と理解されたのではないだろうか。

### 3-2. 実存的イニシエーション・モデル

河合隼雄（1975, 1989, 2000）は、「俗」と「聖」など二項対立を構成する境界が曖昧になり、明確な構造のもとで流動的に進歩し続けていく現代では、イニシエーション儀礼が形骸化したために、個人が内的にイニシエーションを体験する必要があり、そこに心理療法が機能しうると述べる。そして、その背景のもと、Turnerの「リミナリティ」と「コムナス」概念を援用し、「過渡」段階の重要性を強調する。

河合隼雄によれば、心理療法はその枠組みによって非日常的空間が確保されるが、クライアント自身は週の大半を日常で生きているために、現実適応を考慮しながら、日常と非日常の狭間を往来し続けねばならないとされる。ただ、その往来が、日常でもあり非日常でもあり、日常でもなく非日常でもない曖昧な領域に留まる営みを作り出し、その境界的で相互的な性質が、日常生活上の出来事にもイニシエーションの役割を持たせていくと説明している。そして、その一例として「自殺」の問題を挙げる。イニシエーションが賦活される時、そこには「死」への希求性が布置される。それが現実の肉体的な「死」と結びつくときは自殺に、内的イメージの「死」として体験されるときは新たな「再生」に至る契機になると述べる。河合隼雄のイニシエーション論は、「再生」までの過程でいかに「死」を心理的に体験していくかを重視する立場であり、「死と再生」イメージを中核に置いて、実存的側面から心理学的意味を考察している論であると言える。

さらに、河合隼雄（2000）は、現代では1回きりのイニシエーションはありえないとして、「イニシエートされた」と完了形で留まることが逆にイニシエートされない状態になることを強調する。「死と再生」に着目すると、その変容は劇的なイニシエーションとなる。しかし、それが1回で済まないとき、「死」を越える「再生」、「再生」を越えた「死」を越える「再生」のように、何度も繰り返されていく通過性を持つ過程として捉えていく視点が不可欠にな

るだろう。河合隼雄は、心理療法では「過渡にはじまって過渡に終る」態度を重視している。ここには、1回切りの劇的な体験でなされる加入では果たされない、連続的で少しずつ前進、進行していくようなイニシエーションのイメージも含まれているように思われる。

これに続く、わが国の分析心理学におけるイニシエーション論も、「過渡」状況での「死」の体験に焦点が当てられ、論じられている。河合俊雄（2000）は、「構造と論理」の視点から、イニシエーションを成就に導く「没入」の態度の重要性を挙げる。「没入」とは、クライアントの症状や問題に深く入り込んでいく態度を指し、それによって内面への深化が促されて、症状や問題が主体的かつ質的な変容を遂げていくこととされる。ただ、河合俊雄はシャーマンのイニシエーションを取り上げ、自身の身体が解体されていく過程を、死んでいない自分が外側からも見るという態度、すなわち「死」を「否定」している態度も重要であると述べる。また、「過渡」できない状況について、以下のような夢を挙げてさらに考察する。クライアントの夢を引用する。夢：「渡らねばならない川がある。隣には友だち（女性）がいる。流れには波があるの見える。川には怪物が一匹（一人）隠れている。こわい……。一つの可能性がある。目を閉じて、川を渡る。怪物にさわらせる。友だちは見ている。A（子ども）も渡る。多くの男たちが助けてくれる」。河合俊雄は、この夢で、川の中に入り込んでいった自分だけでなく、夢に現れた他者（「友だち」）の重要性に触れ、外側から自分に向けられる眼差しが、イニシエーションの進行過程を支える重要な要件であると指摘する。確かに、儀礼としてのイニシエーションは、その執行者がいることでイニシエーションになるのであり、心理療法がイニシエーションとして機能するのも、クライアントと共にいるセラピストがクライアントとしての自分を見届けているからであるだろう。河合俊雄のイニシエーション論では、その過程を進行させていくためには、外側から自分を眺め

る他者性の視点が重要であることが窺える。なお、この夢に現れた「友だち」は、そのクライエントの中にいる「友だちのイメージ」でもあり、心理療法におけるセラピストのように、必ずしも現実に存在する他者に限定されない点から、本論では「他者性」と捉えることとする。

また、田中(2002)は、「参入と分割」の観点から、「こちら側」から「向こう側」への物理的な「渡渉」ができないという心理学的認識を獲得することの重要性を指摘し、その過程からイニシエーションを捉える。これは、明確な「向こう側」への加入は果たされないのだという断念の態度が、逆説的に、「こちら側」を通過していくイニシエーションの進行を支えているものとして理解できる。

ここで、イニシエーション物語である異界訪問の神話からさらに理解を深めたい。河合俊雄(2014)は、振り返るという要素に注目し、『オルフェウスの冥界下り』を考察する。これは、オルフェウスが亡き妻のエウリュディケを冥界から連れ戻そうとしたものの、後ろを振り返ってはいけないという禁止を破ってエウリュディケの方に振り返ったことで、エウリュディケを永遠に失うことになったという物語である。河合俊雄は、禁止を守らなかったことでの失敗としてではなく、振り返ったことが、「既に失われたもの」としてのエウリュディケとの再会と再喪失をオルフェウスに可能にさせたと述べる。このことから、オルフェウスがエウリュディケと共に還ることができないという断念の態度が、連れ戻そうとする自分を越えるという、新たな展開としてのイニシエーションに繋がっていくと言える。このような、外側から自分を眺める他者性の視点と断念の態度があるならば、劇的な「死と再生」の象徴が生じない場合であっても、それらがイニシエーションを支え、「通過」を可能にすると考えることができる。

## 4. 学校文化と教育臨床に見るイニシエーション

### 4-1. 学校文化と思春期のイニシエーション

思春期は、心身両面で成長する子どもと大人の境界の時期である。河合隼雄(1996)は、思春期の子どもに現れる多様な行動や心理現象を、家出やひきこもり、家庭内暴力や自殺、対人恐怖などから記述する。これらは、思春期に立ち上がる実存的意識を土台に、心理的に自立したい気持ちや、それまで受け入れてきた大人の世界観を脱して「自分なりの」世界観を形成していこうとする課題を内包している。

橋本(2007)は「実存的イニシエーション・モデル」を考える臨床心理学者として岩宮(2000)のイニシエーション論を引用し、思春期の子どもが学校および教育臨床場面でイニシエーションを体験していることを強調する。岩宮(2000)は、思春期のイニシエーションを、「自分の生きている世界を、日常的なレベルを超えてどうイメージし、その中に自分をどう位置づけていくのか、そしてそこで新たな座標を獲得した自分は、それをまた日常とどう結びつけていくか」という問いに取り組んでいくこととする。そして、この体験を支えるのが日常の常識が通用しない「異界」であり、その一つとして、日常と隔絶された学校が「異界」となって子どもたちはイニシエーションを体験していくと結論づける(岩宮, 2004)。

坂元(2001)は、学校文化の儀礼性を「大きな儀礼 (large, formal ceremony)」と「小さな儀礼 (small rituals, interaction rituals)」の分類から明らかにしている。「大きな儀礼」は、入学式や卒業式、体育祭や文化祭といった学校行事、授業や試験など集团的・形式的に顕在化する行為を指し、「小さな儀礼」は、社会学者の Goffman (1967) が提唱する「相互行為儀礼」に則った、日常生活の潜在的で相互対面的な状況において現出する行為を指す。例えば、学校の授業で見られる、授業の挨拶や構成、先生と生徒の行動や態度、服装などがその一例である (Quantz & Magolda, 1997)。

岩宮（2004）は、学校行事について、その準備をする中で、子どもたちの気持ちが高まり、様々な困難という「試練」を乗り越えて行事を終えるとき、それが一つ別の段階へ自分が登っていくようなイニシエーション体験になると述べる。このとき、その責任を一心に背負う校長や、その校長を支える先生など、関わる大人が自分の役割を誠実にこなす姿勢を持つ存在になると、学校という場が「聖地」に変わるだけの力を持ち、イニシエーションが達成されていくと強調する。子どもがイニシエーションを体験していくには、それをいかにやり遂げていくかということ以上に、子どもを取り巻く大人も含めて、イニシエーションを支える場がどう設けられているのかが鍵になると言える。

また、岩宮は、学校が規則に「無自覚」に従うことを「呪縛」と表現し、学校がイニシエーションの受け皿となるために、その「呪縛」をいかに解くかが重要であると述べる。それは単に規則を改善するのではなく、先生が規則の「意識的な吟味を通過」し、「血の通ったもの」にしていくことで可能になる。そして、規則を巡ってやり取りできる関係性が、子どもと先生の間で構築されるとき、子どもは「自分のあり方」と「社会の決まりごと」の折り合いのつけ方を、「生きた個人としての先生」との出会いを通して見出していくと言う。学校の規則とは、子どもに示される、やっではいけないことの決まりごとであり、髪を染めてみたい気持ちや煙草を吸ってみたい気持ちなどは、たいてい場合は叶わない。このような子どもの気持ちに対して、先生が言葉を投げかけるとき、結果としてそれが規則に沿うものであったとしても、そこに先生自身の考えが含まれているということが重要なのだろう。先生が「生きた人間」として自分を見てくれているという実感を持てるやり取りが起るとき、子どもは先生の中の大人性と生き生きとぶつかっていくことができると言える。そこに、先生の持つ眼差しを培地とした、断念によって自分を越えていくイニシエーションを見ていくことができる。学校

文化の中には、学校行事で苦勞や困難を乗り越え、やり遂げていくことでなされる「大きな儀礼」として、「死と再生」の体験を伴う新しい自分へと「加入」していくイニシエーションとともに、緩やかでも、繰り返される毎日の生活の中に現れる、「通過」の体験を伴う「小さな儀礼」としてのイニシエーションが存在していると考えられる。

ただ、中には周囲との関係を閉ざして停滞している不登校の子どもたちが存在している。山中（1978, 2000）は、不登校の子どもへの心理療法論として「思春期内閉」を提唱する。「思春期内閉」とは、「外界にむけてもっぱら閉じこもる」という「内閉（seclusion）」の状態を「サナギ」と見立て、僅かに開く関心事としての「窓」を通した世界とのコミュニケーションによって「孵化」していくという、イニシエーションの過程を援用した理論である。山中によれば、この外側に僅かに開いている「窓」が自分自身と出会わせ、それが「新たな自分」へのイニシエーションとして、出立を支える役割を果たすとされる。「思春期内閉」の視点は、外界から自分を守りながら、「窓」を通して世界との関わり方を掴み、自らのアイデンティティが醸成されていく過程を捉えることを可能にする。この過程は、「窓」を通して自分を見つめる他者としてのセラピストがいることで支えられていると言える。山中は、「脱皮の時期が到来すると、彼らは自ら『出立』していく」とするが、そこには閉じこもり幼虫でい続けることの断念と、その「窓」を通した「サナギ」のままでい続けることの断念が必要であるように思える。不登校として思春期を学校で過ごすことのできない子どもは、スクールカウンセリングや教育相談など、教育臨床で多様にイニシエーションを体験する。次節以降、筆者の臨床体験を交え、教育臨床の場の一つである適応指導教室で見られるイニシエーションの諸相を取り上げ、通過性について考えたい。

#### 4-2. 適応指導教室とイニシエーション

適応指導教室は、「教育センター等学校以外の場所や学校の余裕教室において、不登校児童生徒の学校生活への復帰を支援するため、児童生徒の在籍校との連携をとりつつ、個別カウンセリング、集団での指導、教科指導等を組織的・計画的に行う施設」として設置されている（文部科学省，2000）。様々な理由から不登校状態になっている子ども<sup>り</sup>が通うことのできる施設であるが、単に通うことができる場所ということだけでなく、学校や家に居場所を失った子どもたちが安心して通うことのできる「居場所」としても機能しており、心理臨床的にも意義がある場所である（皆藤，2005）。現在は全国の自治体に設置されているが、「役割や望ましいあり方について明確にされてこなかったこともあり、具体的な有り様は地域の実績に応じてさまざま」（安川，2009）で、子どもによって入室の背景や時期、通室時間が異なるために、その子どもの状況に応じた細やかな支援を行うことが求められている（高，2006）。そのため、適応指導教室の役割や活動には多くの曖昧さが残されているとの指摘がある（菱田，2012）。

現在の不登校支援では「社会的自立」を目指す支援が行われる（文部科学省，2019）。しかし、実際問題として、適応指導教室で聞く子どもの語りには、多かれ少なかれ学校に登校するかどうかの話題がついて回る。篠原（2008）は、「不登校の子どもにかかわる親や教師は、『学校に行けないのなら、少しでも学習が遅れないように適応指導教室に入れよう』あるいは『少しでも学校に類似した場所に通わせよう』と思いがち」と指摘している。適応指導教室が「不登校児童生徒の」とされているように、学校への登校状況から入室の可否が決まり、多くは学校や親から勧められるという経緯があるために、子どもにはこの場所が学校付属の場所として感じられるのだろう。筆者の経験では、特に初期段階で、登校したいと躊躇いながら話す子どもが多いことを実感する。ただ、

そう話すほとんどの子どもの中には、適応指導教室に来た自分の受け入れがたさや、学校に行けないことを心配する周囲への申し訳なさが垣間見える。学校に登校するための布石作りの支援をするにしても、それ以上に、子どもが自分と学校、あるいは学校を含めた社会との位置づけをどう変化させていくかを支えることが重要になると考えられる。

ここで、菱田（2012）が述べる「アジールのな場」としての適応指導教室について取り上げたい。菱田は、個々の要因を前提としつつ、赤坂（1995）の「いじめの排除の構造」から、学校という社会秩序体系からの排除という視点によって不登校を記述し、適応指導教室が持つ曖昧さを、日常的な秩序から逃れることのできる場所である「アジール」に擬える。そして、子どもにとって、適応指導教室が「自由であると同時に保護された空間（Kalf, 1966）」として機能するとき、「アジールのな場」の性質を備え、「居場所」に感じられると同時に、それまでと「異なる自分と出会う」場になることを示唆する。網野（1987）は、「アジール」が、自然と人間、「聖」なる世界と人間の世界の「境界領域」の性質を持っているとする。適応指導教室を学校との関連から見ると、学校への登校が話題になるように、秩序性を持つ場所となる。しかし、子どもにとっての日常である学校と隔絶された場として見ると、そこは日常と非日常とが混ざり合う境界領域である「アジールのな場」として機能していくと言える。適応指導教室は、「異なる自分と出会う」ことが果たされるように、思春期のイニシエーションの受け皿としても機能しているのだろう。

学校への登校や学習はもちろん重要である。しかし、筆者の臨床体験から言えば、適応指導教室では、学校への登校や学習、学力の問題よりも、子どもがただ教室に姿を見せて、自分が居たいように居られることが重視されているように思われる。自分を見る相談員や他の子どもがいる適応指導教室の枠組みからイニシエーションの視点を再考するならば、学校への加入

を第一義とするのでなく、学校に行かないことがダメなことではないのだという実感とともに、学校に通っている同級生と自分は同じではないのだという断念と、今の自分は適応指導教室生であるのだという認識へと至るとき、適応指導教室という“学校的な場”に浸かって、これまでの自分に停滞し、分離できなかった、言わば“不登校の自分”を通過していくことができると考えられる。劇的な「死と再生」が見出せなくても、「異なる自分との出会い」としての、一つのイニシエーションの側面を見ていくことができるのではないだろうか。

筆者が適応指導教室で出会った子どもたちは、生活場面の中で実存的な揺らぎとしてのイニシエーションを何度も体験していたように思われる。そのため、次節では適応指導教室での筆者の子どもたちとの臨床体験について取り上げたい。なお、相談員である心理支援者側の要因から述べていくこととして、子どもの個別の事情については扱わない。

### 4-3. 臨床体験から

まず、取り上げる適応指導教室は、教育センターとして学校とは独立して設置された、副都心隣接地域の教室である。そこは不登校状態にある小学校高学年から中学生を対象としており、中学生を中心に、1日に10名から20名の子どもが通う規模であった。筆者は、相談員として子どものカウンセリングを担当すると同時に、教職経験のある相談員と協働で学習支援や生活支援を担当する立場にあった。なお、ここでは中学生との臨床体験に限定して取り上げていくことにする。

筆者が適応指導教室に関わった子どもの多くは、入室当初は言葉を発することが難しかった。それは、そもそも誰かと話すことの難しさや、“学校の人”をはじめとする大人と話すことへの拒否感からくるものなど、その内実は子どもによって異なっていた。ただ、どの子どもも適応指導教室で生活をする中で、徐々にやり取りへの反応を生き生きと見せるようになっていった。

ていった。

上記の適応指導教室では、学校と異なり、相談員は集団に向けてではなく子ども個人に話し掛ける機会が圧倒的に多いように思われた。だからこそ、子どもは、投げかけられた言葉が、他ならぬ自分に向けられたものと感じ取り、思わず頷いたり、相槌を打ったり、話し返してみたり、何も反応しなかったりなど、何らかの形を表すことになる。加えて、自分と相手との二者間のやり取りであっても、他の相談員や子どもがいるオープンスペースで行われるため、あそこで何か話しているようだという他からの眼差しがあり、自分が目の前の相手とやり取りしていることをより実感されることになるように思われた。

筆者は、入室直後は誰とも「絶対に話さない」と決意していたが、「気づいたら話していた」と振り返る子どもに何度か出会った。そのような子どもは、周囲からの眼差しがある中で、自分に話しかける他者とやり取りを重ねながら、「気づいたら」適応指導教室を自分の居場所にした、それまでと「異なる自分と出会う」体験をしていたのだろうと思われる。そこには、もはや「絶対に話さない」自分のできないのだという断念があったのではないかと考えられる。

また、中学3年生になると、そのほとんどは高校受験を経験する。筆者は作文課題のサポートをする機会も持ったが、そのとき、高校受験に合格するためではなく、その子どもが自分自身の思いをしっかりと文章にして、ピタッと自分に嵌まる言葉と出会えるように添削することを徹底的に行うことを大切にしていた。そうしていると、対人交流に消極的で、人にどう思われるかを気にしてしまう子どもが、同じように課題に取り組む他の子どもと、自分の書いた文章を見せ合ってコメントし合ったり、添削する筆者への批判や苦言を言い合ったりすること、また、自分の文章を読み返して自分の文章の癖を捉えるようになっていたり、“受けの良い”表現でなく自分のことを表現する言葉が何かを考えて

文章にしたりするようになっていった。

高校受験が終わると、自分が高校生になることを実感し始めたような、新たな生活に照準を向けた語りをする子どもが多くなった。しかし、そのような体験を経た子どもは、他の子どもや筆者とのやり取りを含め、高校受験の過程で何が起きたか、どう思ったかをしみじみと振り返り、中には、作文課題の中で書いた表現が気に入っているのだと何度も語る子どももいた。このような子どもは、受験期間中に関わった子どもや筆者、自分の書いた文章を眺める自分など、他者性を伴う視点がある中で高校受験に取り組んでいたのだと思われる。そして、繰り返し課題に取り組む中で、人にどう思われるかを気にすることの断念、すなわち、子ども同士で文章を見せ合うことや、“受けの良い”、“受験向き”の形式的な言葉を書くことの断念を経て、これが自分だと言える言葉と出会うような体験を、毎日積み重ねていったのだろう。ここには繰り返される断念の体験が存在していたと言える。

合格や卒業など、岐路の出来事を越えることは、「サナギ」から「チョウ」に変容する「孵化」のときであり、それは、これまでの自分が死んで新たに生まれ変わることを果たすイニシエーションである。しかし、適応指導教室で繰り返される生活の中で、他者性の視点を支えとしながら断念が生じるとき、これまで見出されなかった「異なる自分と出会う」瞬間が訪れるように思える。一見すれば、単に生活上で起こった小さな変化としてしか見えなくても、適応指導教室の中では、昨日までの自分を「通過」して、「異なる自分」も自分であるのだという実感を積み重ねる形でのイニシエーションが果たされていくのではないだろうか。

## 5. おわりに—イニシエーション概念における通過性

本論では、van Genneep が提唱した、原義の通過儀礼概念、イニシエーション概念に沿って、日々繰り返されていくあらゆる「通過」を

もイニシエーションとして理解していくという立場から、イニシエーションの諸相について検討した。その際、分析心理学におけるイニシエーション概念の理解から、他者性の視点と断念の態度をキーワードとして取り上げ、適応指導教室での臨床体験をもとに考察した。

現代のイニシエーション研究は内的体験に重きを置き、臨床心理学においては心理療法での内的変容に焦点を当てた考察が重ねられている。特に、分析心理学では、夢などの無意識内容や、「死と再生」をはじめとした象徴的理解を重視することで、非連続的で飛躍的、劇的かつ物語的文脈を持つ変容についての論を展開している。心理療法への来談者は、現実適応に困難さを抱え、越えることのできない壁の前で行き詰っているがゆえに、その過程で主体そのものが別のものになるような変容を遂げて、各々の心理的問題を越えていく。ただ、何度もイニシエーションを体験していく必要がある現代だからこそ、イニシエーションとして越えるべき局面は何度も現れ続けていくだろう。どのイニシエーションも明確な「分離」、「過渡」、「統合」の構造で捉えきれなくなっているとすれば、「分離」に含まれた「分離」、「過渡」、「統合」など、劇的さが必ずしも見られない、“小さな”イニシエーションの存在を捉えていく必要もあると思われる。

日常性と非日常性という両義的側面から、適応指導教室を境界領域および「アジールのな場」として捉えるとき、イニシエーションに擬えられる心理的成熟が生じているプロセスを見ていくことができる。筆者が適応指導教室で出会った子どもたちは、卒業期までの間に高校受験のみならず、毎日の生活においても、様々な「異なる自分」と出会っていた。自分に向かう他者性の視点を支えに、できないという形での断念を幾度も重ね、これまでの自分を「通過」していくとき、これが自分だと言える言葉と出会った瞬間のように、自分自身と通じていく小さなイニシエーションを積み重ねる体験をしていたと思われる。そこに、イニシエーションの

連続的で漸進的な性質を見ていくことができるのではないだろうか。

今後は事例研究として適応指導教室で見られるイニシエーションについて詳細に検討し、通過性に着目したイニシエーション概念について引き続き考察を深めていきたい。

## 注

- 1) 学校教育法をはじめ、文部科学省など教育領域における定義によれば、小学生を「児童」、中学生を「生徒」と呼んで区別している。一方、医療領域においては、そのような区別をせずに「子ども」あるいは「小児」と総称している。本論では、臨床心理学の視点から考察していくことを主眼に置いていることから、包括的に「子ども」と呼ぶこととする。

## 文献

- 赤坂憲雄 (1995). 排除の現象学 筑摩書房
- 秋山博介 (2007). 不登校についての一考察 (その2) 学校教育とひきこもり、フリーター、ニートとの関係 実践女子大学生生活科学部紀要, 44, 1-14.
- 網野善彦 (1987). 境界領域と国家 日本の社会史第2巻 境界領域と交通 岩波書店
- 綾部真雄 (2006). イニシエーションの今日的可能性—解説に代えて— La Fontaine, J.S. (1985). *Initiation Ritual*. Penguin Books. (綾部真雄 (訳) (2006) イニシエーション—儀礼的“越境”をめぐる通文化的研究— 弘文堂 pp.259-292.)
- 綾部真雄 (2012). 儀礼研究受難の時代—「通過」概念の汎用性をめぐって— van Gennep, A. (1909). *Les rites de passage: Étude systématique des cérémonies*. Paris, Librairie Critique. (綾部恒雄・綾部裕子 (訳) (2012) 通過儀礼 岩波文庫 pp.335-355.)
- Eliade, M. (1958). *Birth and Rebirth*. Haper & Brothers Publishers. (堀 一郎 (訳) (1971) 生と再生 東京大学出版会)
- Goffman, E. (1967). *Interaction Ritual: Essay in Face-to-Face Behaviour*. Anchor Books, Doubleday & Company. (広瀬英彦・安江孝司 (訳) (1986) 儀礼としての相互行為—対面行動の社会学— 法政大学出版局)
- 橋本朋広 (2008). 心理療法におけるイニシエーション・モデルの検討 大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要, 1, 11-21.
- 菱田一仁 (2012). アジールとしての適応指導教室 京都大学大学院教育学研究科紀要, 58, 301-313.
- 伊藤研一 (1997). 援助実践から見た中学生の不登校 人間科学研究, 19, 59-66.
- 岩宮恵子 (2000). 思春期のイニシエーション 河合隼雄 (編) 心理療法とイニシエーション 岩波書店 pp.105-150.
- 岩宮恵子 (2004). 「学校」という呪縛 倉光修 (編) 臨床心理学全集第12巻 学校臨床心理学 誠信書房 pp.185-214.
- Jung, C. G. (1912). *Symbole der Wandlung: Analyse des Vorspiels zu einer Schizophrenie*. RascherVerlag (野村美紀子 (訳) (1985) 変容の象徴—精神分裂病の前駆症状— 筑摩書房)
- Jung, C. G. (1928). *Die Beziehungen zwischen dem Ich und dem Unbewussten*. Darmstadt, Reichl. (松代洋一・渡辺学 (訳) (1995) 自我と無意識 第三文明社)
- Jung, C. G. (1945). *The Philosophical Trees*. Collected Works, Vol.13. Bollingen Foundation Inc. (老松克博 (監訳) (2009) 哲学の木 創元社)
- Jung, C. G. (1953). *Two Essays in Analytical Psychology*. Collected Works, Vol.7. Bollingen Foundation Inc, 231.
- 皆藤靖子 (2005). 適応指導教室における取り組みの実際 臨床心理学, 5 (1), 51-56.
- Kalff, D. (1966). *SANDSPIEL: Seine Therapeutische Wirkung auf die Psyche*. (山中康裕・大原 貢 (訳) (1972) カルフ箱庭療法 誠信書房)
- 河合隼雄 (1975). 心理療法におけるイニシエーションの意義 河合隼雄 (1986). 心理療法論考 新曜社 pp.53-63.
- 河合隼雄 (1989). 生と死の接点 岩波書店
- 河合隼雄 (1996). 大人になることのむずかしさ 岩波書店
- 河合隼雄 (2000). イニシエーションと現代 河合隼雄 (編) 心理療法とイニシエーション 岩波書店 pp.1-18.
- 河合俊雄 (2000). イニシエーションにおける没入と否定 河合隼雄 (編) 心理療法とイニシエーション 岩波書店 pp.19-60.

- 河合俊雄 (2014). 九九話におけるインターフェイスと振り返り 河合俊雄・赤坂憲雄 (編) 遠野物語 遭遇と鎮魂 岩波書店 pp.239-250.
- 北山 修 (2007). 劇的な精神分析入門 みすず書房
- La Fontaine, J. S. (1985). *Initiation Ritual*. Penguin Books. (綾部真雄 (訳) (2006). イニシエーション—儀礼的“越境”をめぐる通文化的研究— 弘文堂)
- 文部科学省 (2000). 生徒指導上の諸問題の現状について [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/003/toushin/001219.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/003/toushin/001219.htm) (2020年9月14日取得)
- 文部科学省 (2019). 不登校児童生徒への支援の在り方について (通知) [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/1422155.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1422155.htm) (2020年9月14日取得)
- Quantz, R. A., & Magolda, P. M. (1997). Nonrational Classroom Performance: Ritual as an Aspect of Action, *The Urban Review*, 29 (4), 221-238.
- 坂元一光 (2001). 学校教育研究における儀礼論的接近—若干のレビューと展望— 九州大学大学院教育学研究紀要, 4, 159-172.
- 篠原道夫 (2008). 適応指導教室の意義——サナギとしての不登校 馬場謙一・松本京介 (編) スクールカウンセリングの基礎と経験 日本評論社 pp.268-278.
- 高 賢一 (2006). 適応指導教室における子どもの支援方法の改善策に関する研究 金沢星稜大学論集, 40, 17-25.
- 田中康裕 (2002). 参入と分割—イニシエーションの新しい在り方とそこでの垂直方向の「渡渉」について— 大正大学カウンセリング研究所紀要, 25, 56-67.
- Turner, V. W. (1976). *The Ritual Process: Structure and Anti-Structure*. Aldine Publishing Company. (富倉光雄 (訳) (1976). 儀礼の過程 思索社)
- van Gennep, A. (1909). *Les rites de passage : Étude systématique des ceremonies*. Paris, Librairie Critique. (綾部恒雄・綾部裕子 (訳) (1995) 通過儀礼 弘文堂)
- 渡辺和子 (2011). ギルガメシュの異界への旅と帰還—「英雄」と死— 東洋英和女学院大学死生学研究 研究所 (編) 死生学年報, 7 —作品にみる生と死— リトン pp.135-164.
- 山中康裕 (1978). 少年期の心 中公新書
- 山中康裕 (2000). 「内閉論」からみた「イニシエーション」 河合隼雄 (編) 心理療法とイニシエーション 岩波書店 pp.61-104.
- 柳川啓一 (1989). 宗教学とは何か 法蔵館
- 安川禎亮 (2009). 適応指導教室における不登校支援からの提言—適応指導教室・家庭・学校のコラボレーションを巡って— 学校メンタルヘルス, 12 (1), 85-90.